تیسرا کیپٹن

特62
421

稻垣陽一郎 編
アンドレウ、マウレー 譯

祈の秘訣

日本聖公會出版社

例言

一本書は原名を"Pray Without Ceasing, Helps to Intercession"と云ひマウレー氏が祈禱の精神の奮興を圖らんとして一ヶ月三十日間の祈禱題目と之に對する助言を添へ日用に供せんとして或は小冊子とし或は其著書"The Ministry of Intercession"の卷末等に附せられしものにして何國何人によりても自由に飜刻若くは飜譯出版を望まるゝものなり

二此の譯書は右著書の主旨に依り明治卅二年十月より東京立教學院ミッション發行の月刊「築地の園」に「斷へず祈るべし」との題下に連載せしを今回完結の上丁寧校譯し

「日用祈の栞」として一小冊子に綴り兄姉の用に供せんとせるものなり。

三　隔ページに少の餘白を存せるは本書序言にあるが如く讀者の特稿の題目と日附を記し又其應驗の日をも記さんが爲なり。

四　譯者は此書が携帶に便からしめんが爲に特にポッケットブック様とせり。

五　譯者に原書を贈られし敬友永野武二郎君が出版に當り一親しく校譯の勞を執られしを謝す。

千九百一年十月東京築地六角塔下にて　譯者識

祈るべし

日用祈の栞

斷へず祈るべし誰かなるべきものが、如何にしてこを爲し得るや、日々世の煩に圍まれ、如何にして母はこを爲し得べき。如何にして瞼は斷へず眼を斷へず其事件を見得るや。如何にしてわれらは斷へず呼吸し、感覺し、又聽くことを得るや。蓋是等は皆健全なる常生の作用たるに過ぎず、靈生に於ても此の如し、健全にして聖靈の充分なる力の下に在らば、斷へず祈るは只自然護る爲に常に備をなし得るや。

の事たる耳。

斷へず祈るべし。之れ祈の應へらる迄忍びて斷へず祈るの意なりや。將又常にわれらを活かすべき祈の精神を保てとの意なりや。然り兩者を意味す。われらの主イエスの摸範は能く之を示せり。われらは一定の時に密室に退き此に屢々不撓の祈をなし、忍びて待つべきなり。又終日われら全心を天の事に馳せて、神の聖前に歩むべきなり。祈の精神は一定の祈の時なくば鈍り且弱く薄らぐべし。又斷えざる祈の精神なくば定時の祈禱に益少かるべし。

斷へず祈るべし。之れわれら自らの爲にせよとの謂なりや、將他のに爲にせよとの謂なりや。兩者を意味す。之を實行するに當り失敗する者多きは唯之を己れの爲にのみなすを以てなり、枝が健全なる生涯を送り豐かに養液の注き入れられん事を期し得るは唯萬事を抛ちて實を結び益繁多に實を結び多くの實を結ばん事に自を委ぬる時にのみなり。キリストの死はキリストをして永遠の祈者たらしめぬ。キリストと偕に罪と己の死せばもはや己の事を思煩はざるに至り、己を祈求者たるの品位に高むべし即ち神に求める人の爲に生命と恩寵を得るなり、己が使命を知り、此事業を始めよ、之に全力を注げ、さすれば識らざる中に衷心常に祈るべし と云ふ事に就き解する所あるに至るべし。

斷へず祈るべし。―如何にして之を學び得るや。事を知るの最良の法は(實に唯一の法也)先づ之を實行するにあり。先づ毎日假令ば十分か十五分の特別の時間を作りて、神とおのれに告げよ、われ人の爲に一祈求者として前に來れりと。又之れは朝禱若しくは晩禱の後にても又何時にても可なり。若し毎日同刻を期する能はずとも患ふる勿れ唯此のつとめを爲すを忘れざる樣注意せよ。キリスト汝を選び汝に人の爲に祈らんことを任命したまへるあり。之を若し始め其祈禱中に特殊の熱心或は信仰或は能力あるを感せずとも、之が爲に沮喪する事なく、靜かに己れの弱きを主に告げよ、聖靈汝の裏にありて、如何に祈るべきかを敎へ給ふを信じ又祈り始むれば神汝を扶けたまふを確信せよ。汝が之を始め之を續くるに非ずば、神は汝をたすけ能はざるなり。

斷へず祈るべし―如何にして我儕は何の爲に祈るべきかを知るべき。若し一旦祈り始め、深くおのが周圍の有樣を思ひ其要する所を考ふれば祈るべき所を知る難きに非ず。されど之が助とあさん爲め、此栞は一ヶ月間の祈の題目と、之に關する助言を添へて出版する者にて月々繰返して用ひ遂には一層充分に聖靈の導に從ふ事を學び又必要あらば自ら祈禱表を作り之に從ひて祈禱を實行し得るに至らしめんとする者あり。其用法に就き左に少しく述る所あ

るべし。

一如何に祈るべき乎　此栞を用ふるものは、日々二個の冒頭あるを見るべし、即ち一は何を祈るべき乎、他は如何に祈るべき乎なり。單に祈の題目のみ出さるれば、日々神の聖前に姓名、事件等を陳列し之を繰返すに過ぎずして、事重荷となるべし。如何に祈るべき乎ある冒頭の下に助言を與へたるは、此事業の心靈的性質のものあるを示し、神の助の必要あるを知らしめ、神は確かに聖靈を以て、正しき祈を爲し得る恩寵を與へ、又われらの祈を聽きたまふとの信仰を勵ましたんが爲あり。誰も初より自ら大膽に進み出で其祈聽かるべしと信ずる事を直に學ぶは難し、されば日々祈るときに數分間靜かに神の聖前に至りて、われの如き者の祈すら確かに聽きたまふ事を憶起さしめんとし、且つ我儕を召し父を信ずる信仰を以て祈り其哀求する恩惠を受けしめんとし給ふ神の聖言に耳を傾くべし。此如何に祈るべき乎に關する助言を深く心に藏め常に其默想中に働かしめよ。祈求の事業は地上に於てキリストの最大事業あり、蓋しキリストは人の爲に神の前に犧牲となりたれば此任を受け給ひしなり、祈求の事業はキリスト信者が爲し得る最大事業なり、人の爲に神の聖前に自らを犧牲に供せよ、さすれば此事業は亦おのが光榮となり喜樂となるに至るべし。

二、何を祈るべき乎

聖書はわれらに祈るべき多くの事を教ゆ、即ち全べての聖徒の爲、全ての人の爲、王と執政者の爲、患難ある人々の爲め、工人の送られん爲め、福音の役者の爲め、全ての悔改者の爲、罪に陷りし信者の爲、われら直接關係ある相互の爲めに祈ること等なり。今の教會は昔新約全書の書かれし當時より遙かに大にあれり。從て傳道事業と教役者の種類も大に增し教會と世界の要求も大に明になりたれば何所に最も祈禱は要せられ何所にわれらの全心を注ぐべきかを知らんが爲に時を費やし思をめぐらすを要するに至れり。聖書が求むる祈求をなさんが爲めには、われらは全へての聖徒全ての人全ての要求を心中に藏め得る廣き大なる心を要す。此祈の栞の企望は即ち祈を要し又すべての基督信者が興味を有すべき題目を示すにあり。

或は多の人はかゝる廣大なる題目に就き祈るを難しとするならん、されど勿論此等各題目の上にわれらの最も直接に關係を有する範圍に限りて特殊の祈求を爲し得るあり。或特殊の題目の他に比して遙かに興味あり、急迫を感するときは、其題目をとりて日々之が爲に、祈り得るは無論なり唯眞に祈求の爲に時間を費され、信じて祈り求る精神之によりて開發せらるゝとせば、此栞の本目的達せられりと云ふべきあり、一方に於て時に心を廣して廣く祈るを要すれ

ども、又祈愈適切愈確實なるを得ば益可なり。之が爲に各ページ終に餘白を殘し此に神の聖前に訴へんとする特禱を記するに供せり。

三、祈の應答　キリスト信者が祈の題目と其の答を記すべき數種の小冊子は既に出版せられたり。此栞に於ても毎ページ餘白を殘し個人の靈生及び特殊の事業に關して更に確實なる題目と其に對する應答を記するに供せり。

凡ての聖徒の爲に祈る時又は凡ての傳道會社の爲に祈るとき、其の祈りが如何にして何時答へらるべきを知るは難く、又其祈が答へられし時我儕の祈禱も充分預りて力あり

しかを知るは難し。されば神が吾等の祈に答へ給ふこと證するは極めて必要なり。此が爲に祈禱の題と其答を得たる時日を記すは至要の事なり、全ての(聖徒信者と云ふも同じ)の爲めに祈る日には己が教會に屬する者或は其祈禱會に出席せる者を擧げ彼等の中にリバイバルの起らん事を祈れよ。又傳道會社の爲に祈る時には己が特に注意せる傳道地或は宣教者を擧げ祝福を求めよ、而して其來るをまち望み神を崇むるに至るべき也。

四、祈禱の團体　此の祈の栞を出版するは今日現存する祈禱同盟或は祈禱團体に又新團体を加へんとするにあら

ず。第一の目的はキリスト信者にして實際祈求の事に關せず、其召を悟らず或は彼等の祈の力ある者あるを信せざるより實際祈求の働に與せざる者を振ひ興さんが爲なり。

又之と共に既に祈れるものには此祈求事業の極めて重大なるを更に充分悟らしめ之が爲に全力を集注せしめんが爲あり。全教會に聖靈の權能一層充分に顯はれんことを毎月の第一日に祈る團體あり余も亦此に應じて第一日の祈の題目を此に取り、同一の思想を鍵語に與へたり。周圍の要求と神の約束を識り又祈に於て打ち勝つべき障害の大あるを知れば知るほど、日々此事業を以て一切他の興味を

壓する異生の事業たらしむべきを感ずべし。大なる祈禱團體を作らずとも尚ほ祈求の恩寵に固ふせられん爲小き祈禱組を作り或は一ヶ月間或は一ヶ年或は歳年間にても日々各提出せる特殊の祈禱題目に由りて祈らば益する所多かるべし、若し牧師が近傍の信者を集めて共に此栞の題により又特殊の祈禱題によりて祈り或は其教會に屬する熱心ある會員を集め信仰復興の爲めに共に祈らば今誰も之を雇ふ者なきが故に空しく立ち居る人々の中此の祈求の大事業に與る樣訓錬せらるる者もあるべし。

五、誰か此業に當り得べき　此の祈求の恩寵を味ひ此を實行するに從ひいよ〳〵此事業の大にして又我等の弱きを

感するに至る。かく感ずる者は宜しく「我恩惠汝に足れり」との聖語に耳を傾け眞實に「我等の力は神に在り」と答へよ。沮喪する勿れ此れキリストの祈求の大業に與るあればあり、されば其重荷、其苦惱、其凱旋、其勝利も皆キリストの者あり。主の摸範に倣ひ衷に住み給ふ聖靈に自を任せて如何に祈るべきかを知れ。主は人の爲に已を神の前に犧牲とあし給へり。此れ祈求の權理と能力を得んが爲あり「彼は衆くの人の罪を負ひ罪人の爲に祈求をあし玉へり。」されば憚らずして其信仰を主が完成し給へる事業の上に置き、其心を主の死と其生涯に於て主と一ならしめよ。かくて主の如く人の爲に已を神の前に犧牲とせよ、此れ最上の特權あり、此れ眞實にして完全ある主との一致あり。此れ主の場合に於ける如く又汝の祈求の能力あり。惠まれたるキリスト信者は來りて汝の全心全生を祈求に與へよ、されば其の幸福も能力も知るに至らん。我等が神に捧ぐるものをして是に勝るものあらしめよ。

第一日

何を祈るべき乎　聖靈の權能を

「跪きて父に願ふは爾曹その聖靈により權能を以て强められんことあり」　弗三。一六

「父の約束し給ひし事を待つべし」　使一。四

「すべて神の默示を給へる聖意に適はざるものとり去られて神の聖靈の恩寵と精力の充分に示さるゝことを願ふ是れ我儕聖靈を憂へしむることなく、其教會に於て益强大なる權能を以て働き給はん爲め、又之によりて崇められ、人之によりてめぐみをうけん爲めなり」

神は其擧げられ給ひし聖子に約し、又聖子によりて約したまふ一つ約束あり、我等の主が教會に與ふる一の賜物あり又教會の有する一つの要求あり、すべての祈の中心となる一の慾求あり、是れ即ち靈聖の力也、之を一の祈禱となすべし。

如何に祈るべき乎　幼兒が父に願ふ如く

「爾曹のうち父たるもの誰か其子パンを求めんに石を與へんやまして天に在す父は爾曹に聖靈を與へざらんや」

路一一。一一一三

子供がパンを求むるが如くに、簡明に信賴して願ふべし。「神は汝の心曹に、アバ父よと呼ぶ其聖子の靈を遣り給ひ」しが故に、汝は之を爲し得べし。此聖靈は汝に子の如き確信を與へんとて、汝の衷にあるなり、此靈汝の衷にありて祈り給ふ事を信じて何處にても其聖靈の權能を求むべし、又其力の顯はれん事を求むる場所或は集會を云へ。

特禱

第二日

何を祈るべき乎　懇求(サップリケーション)の心を

「聖靈自から言ひ難きの慨嘆を以て我儕の爲に仲祈をなす」　羅、八。二六、

「我祈の靈をそゝがん」　亞一二。一〇

世界の傳道は先づ祈の復興に因る、世界の傳道に於て人を要するよりも、更に深く要するものは、全世界の爲めに祈る力ある祈の秘訣にして、我儕の活氣なき生涯の深底に其必要を見るも人多く之を忘れたり」

神の子供は皆祈るが爲の聖靈を有す。神は靈を注るばかり賜へんと待ち給ふ。汝自からの爲、又汝に與する者の爲に、祈の靈の溢がれん事を求めよ。汝の祈禱會の爲めに之を求めよ。

如何に祈るべき乎　靈によりて

「恒に各樣の禱告と祈求を以て、靈に由りて、祈るべし」　弗六。一八

猶廿

「靈聖に感じて祈るべし」

われらの主は、その復活日に弟子等に聖靈を與へ給へり此靈力により弟子等はペンテコの日の充分なる降臨を待つを得たりし、われらが聖靈の充分なる顯示を祈り得るは、唯すでに、われらの中にあり、われらの知りて之に服從する靈の力によれり。天の父に謂へ、聖子の靈、我衷にありて切に父の約束のものを求めしむと」

特禱

第三日

何を祈るべき乎　すべての聖徒の爲

「恒に各樣の禱告と、祈求を以て、靈に由りて求めかつ諸の聖徒の爲にも、愼みて此事を爲し祈りて倦ざさるべし」　弗六。一八

一の体の各部は、其全体の休戚に關す、互に相扶け、互に相合して一体初めて全し。信者は一体なり、啻に已れの屬する教會、已れの屬する團体の爲のみならず、先づ諸ての聖徒の爲に祈るべきなり。此の大なる私なき愛は、キリストの靈と愛が、信者に祈ることを教へつゝある證なり。先すべての爲に祈れ。然る後汝に近きものゝ爲にも祈れ、

如何に祈るべき乎　聖靈の愛によりて

「爾曹もし相愛せば之によりて、人々爾曹の我弟子なるたとをしるべし」　約一五。一三

「かれらすべて一になり、世をして、汝の我を遣はし給ひしことを信せしめんが爲なり」　約一七。二一、

「兄弟よ、我聖靈の愛に緣りて、爾曹に勸む、願くは、我と共に力を竭くして、我が爲に神に祈ることを爲よ」羅、一五。三〇

「何事よりも先づたがひに篤く相愛すべし」彼前四、八。

われら若し祈らんとせば、愛せらるべからず、われら神に諸ての聖徒を愛すと謂ふべし。われら聖靈の愛によりて篤き愛を以て祈るべきなり。

特禱　一一、一一、

第四日

何を祈るべき乎　聖めの靈を

神は聖し、神の民は聖き民なり。神言ひ給ふ、我聖し我は汝を聖く爲る主なりと。キリストは祈り給ひぬ「彼等をきよめ給へ汝の眞理によりて彼等をきよめ給へ」と。パウロは祈りぬ。「神汝の心を堅くし聖して責むべき所なからしめ給はん事を願くは神汝を全く聖くし給まはんことを」

全教會の諸聖徒即ち神の聖なるものか聖別の靈の治下にあらんことを祈れ。特に新悔改者の爲に祈れ汝の近隣又教會にある聖徒の爲に祈れ。汝の特に關係あるもの〻爲に祈れ、特に又彼等の特殊の要求弱點又は罪を思ひ、神が彼等を聖めたまはんことを祈れ、

如何に祈るべき乎　神の全能を信じて

人に能はざる所を、神は能くし給ふ。我曹の願ふ事の大にして其の遂げらるゝの難きを思ひ、又我曹の賤しきを思ふときも之を忘るゝ勿れ祈は啻に希ふこと求むる事のみに非ず「信じて受くること」あり。神の前に靜まり神の全能者にていますを知り得るやう祈れ、不思議を行ひ給ふ神に汝の祈願を委ねよ。

特禱

一、
二、
三、

第五日

何を祈るべき乎　神其民を守りて世の屬とあらしめざる事を、

「聖父よ爾の我に給ひし者を爾の名に在らしめ之を守りたまへ、われ爾に彼等を世より取りたまへと祈らず、唯彼等を守りて惡に陷らす勿れと祈る、われ世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非ざればなり」約一七。一一、一五、一六、

最後の夜にキリストは其弟子の爲に三事を祈りたまへり即ち、(一)彼等を守りて世の屬とならしめざる事。(二)彼等の聖められんこと。(三)彼等愛によりて一にならんことなり。汝はキリストの祈りたまひし如く祈るより勝れる事をなし得ず。神の民の爲に、彼等が世と世につける精神より離れ、聖靈によりて世の屬かざる者の如く送生せんことをいのれ。

如何に祈るべき乎　神に向て憚る所あく

「愛するものよ、我らが心みづから責むることあくば、神に向て憚る所かるべし。且つ我儕求むる所は、彼より受くそは其誡を守りて其悅ぶ所を行へばなり。約壹三〇二一、二二、

此等の語を暗記せよ、深く心に銘せよ。ヨハネの如く心に責められる〻所なく、神に向て疑を懷かざる確かなる心を以て近づき得るものとなれ。此心を以て、罪に陷る兄弟の爲に祈れ、(約壹五〇十六)孝子の如き從順の心と靜なる確信を以て罪に貢けつつある兄弟の爲にいのれ、染められざるやうすべての爲にいのれ、而て屢々謂へ、「我等求むる所は受く、夫は我儕守りて之を行へばなり」と

特禱

第六日

何を祈るべき乎　教會に愛の精神の起らんが爲

「わが祈るは、我等の一なる如く、彼等も互に一にならん爲めなり即ちわれ彼等に在り、なんぢ我にをるが故なり、世をして爾の我を遣はせしこと、又なんぢ我を愛する如く、彼等をも愛することを知らしめん爲なり」又爾の我を愛するの愛彼等に居又我彼等に在らん爲なり、

約一七〇二二二三二六、

加五〇二二、

「靈の結ぶ果は愛なり」

キリスト父と一なる如く、信者はキリストにありて一なり、神の愛信者の上に止まる又信者の裏に住み得るなり。聖靈の能力によりて、此愛信者の中に起りて世をして神の愛、彼等の中にあるを知らしめたまはんことを祈れ、切に之を祈れ。

如何に祈るべき乎　神の紀念し給ふ事を求めて

「われ汝の石垣の上に斥候をおきて、終日終夜たえず默すことなからしむ汝らエホバに紀念したまはんことを求むるものよ、自からやすむ勿れ」　賽六十、二〇、六、

われは任命せられたる祈求者なりとの自覺全心に充つるまで此等の語を研究せよ。此信仰を以て神の聖前に近づけ。祈り求むるはわれのつとめなり、聖靈は祈るべき事を教へ祈るべき法を示したまふべしとの思想を以て、世界の要する者を研究せよ、我が終世の大業は、キリストの如く信者の爲又未だ神を知らざるものゝ爲に、祈り求むることなり、之れ汝の常に懷抱せる意識たるべし。

特禱

第七日

何を祈るべき乎　役者等の爲に聖靈を

「我爾曹に勸む願くば我と共に力を竭くして我ために神に祈ることをせよ」　羅一五〇三十

「神われらをも救ひたまはん、爾曹も我曹の爲に祈りて相たすく」　哥後一〇十、十一、

キリストの教會に於ける教役者の大軍を見ずや、如何に彼等は祈を要する事切なり。若し彼等にして、皆聖靈の力によりて裝はるゝときは如何に有力なるべき。時を定めて之が爲にいのれ、之を追求めよ。汝の後者を思へ、彼の爲に特に求めよ。汝の町、或は近村、又世界の傳道を思ふとき皆聖靈に充たされんことをいのれ。彼等の爲に「汝等上より能力を授けらるゝ迄留れ」「聖靈爾曹に臨むによりて爾曹能を受くべし」との約束に訴へよ。

如何に祈るべき乎　ひそかに

「汝祈るときは嚴密(ヒソカ)なる室にいり戸を閉ち隱微(カクレ)たるに在す爾の父に祈れ」　太六〇六

「イエス祈禱せんとて密かに山に上り日くれて、獨りそこにいませり」　太一四。二三、　約六〇。一五、

汝唯ひとり神と共にあるとき、急くことなく神の僕等の爲にいのらんとて今此に神に對面するを確認せよ。自に勢力なしと思ふ勿れ、我祈らずとも何の影響なしと言ふ勿れ。汝の祈と信仰は事態を一變し得べし。嚴密なる所に其役者の爲に神に叫べ。

特禱

第八日

何を祈るべき乎　**教界のすべての工人の爲に聖靈を**

「汝等も我儕の爲にいのりて相たすく、かくて許多の人により我儕に賜りし恩寵を許多の人も我儕の爲に感謝するに至らん」　哥後一〇一一、

多數の工人は我等の教會、傳道會社、鐵道、郵便及び兵士、水兵、青年男女、墮落せる男女、貧者病人の間に働きつゝあり、是れが爲に眞に神を讃むべきなり、若し彼等にして各聖靈に充たさるゝあらば其成就る事實の大なる事思ふべし、彼等の爲に祈れ、さすれば汝彼等の事業の分擔者となり、何處にても神のめぐみをきくときに汝も亦之によりて、神を讃美するに至らん。

如何に祈るべき乎　**確實なる祈禱を以て**

「汝われに何を爲せられんと欲ふや」　路一八。四一

主は此人の欲する所を知りたまへど尚彼に問ひたまひき神の聖前に我曹の願望を發言するは、汝の要する答の如何なるかを知り得るやう極めて簡明にいのれ、神の工人の大群を思ひ、神民のいのりに答へて、確實に彼等をめぐみたまはんことを求め且待望め、而して一層確實に周圍の役者の爲め祈れ。祈りは虔敬なる願望の發表に非ず、其目的とする所は信んじて忍ぶ祈によりて恩寵を受け又之を呼び下すにあり。

特禱

第九日

何を祈るべき乎　傳道事業の爲

「世界」の傳道は、先づ祈の奮興に因る、われら意氣消沈せるとき人物を要するよりも更に深く要するものは、世界を通じて力ある祈にして、之人に忘れられたる秘訣あり」

「かれら主に事へて、斷食せるとき、聖靈いひけるは、我爲にバルナバとサウロを甄別て、此に於て、斷食して祈禱をなし、之を往かしむ、如此二人は聖靈に遣されて赴けり」

徒一三〇三、四、

傳道の事業、皆此精神にて爲されんことをいのれ、即ち(一)神を待ち望み(二)聖靈の聲を聞き(三)祈禱と斷食を以て、人を派遣するにあり。我曹の教會に於て我儕が傳道事業の爲に同情を表する事又是れが爲めに働く事が皆聖靈と祈禱の能力にて行はれんことを祈れ、聖靈に充たされ祈に力ある宣教師を出し得るは、聖靈に充ち祈たつとむる教會なり。

如何に祈るべき乎　ひそかすに

「我唯祈るなり」　詩百九〇四

「我曹は常にいのることをすべし」　徒六〇四

「汝神の前にありては輕々しく口を開くなかれ、心を攝めて妄に言をいたす勿れ」　傳五〇二

「イエス終夜神に祈れり」　路六〇一二、

時間は物の値を定むる主なる標準なり、費す時間の長短は感ずる興味の淺深を證するものなり。神と共にあらんとするには時間を要す、即ち(一)神の臨在を確認せんが爲に(二)神が自からなを知らしめたまふやう待望む爲に(三)我儕が求むる處の切要なる考へるかを感ぜん爲めに(四)キリストをわが裏に入れまつらんが爲(五)聽かれたりと信じ得る迄祈らんが爲なり。祈ないそく勿れ、教會の傳道事業の爲に恩寵を祈り下せ。

特禱

第十日

何を祈るべき乎　宣教師の上に神の霊を

「今日世の要するものは啻に宣教師の數を増さん事のみならず、既に神に遣はれて海外の傳道戰場にあるもの、各の上に神の霊のそゝがれんことあり、」

「聖霊汝曹に臨むによりて後、爾曹能力をうけ地の極にまで我證人となるべし」　使一〇八

神は常につとめを僕に命じたまふとき、其を爲し遂ぐるに適ふ能力を與へたまふ。サタンを逐ひ、其城壘を毀つの如何に大にして難き業なるかを思ひ、之にたゞさはる人々皆聖霊をうけ聖霊によつて、其事業を爲し遂げんことをいのれ。宣教師等の困難遭遇ふて、彼等の爲にいのれ。

如何に祈るべき乎　神の誠實に任せて

「約束せしものは誠信あれば、」　來十二二三、

「かれ約束せしものは、誠信ありとしつればあり」　來十一一〇十一、

神が其聖子には其主國に就て、又教會には異邦人に就て、其僕等には働に就て、汝自からには汝の祈に就て、如何に約束せられしかを思ひ、確めていのりした汝を(祈に)召したまひしものは誠實なるものなれば、彼又汝に約束せしことを成したまふべし。宣教師を一々擧げ、彼等と一緒になりて、爾の祈きかれたりと知るに至るまでいのれ。　生き甲斐ある一事はキリストの王國の爲に生くる事なりとして生涯を送れ。

特禱

第十一日

何を祈るべき乎　尚多くの工人を得んが爲

「稼主に工人を收穫場に送らんことを願ふべし。」

太九〇三八

必要に應ぜん爲に己れの弟子より援助を求め給ふとは、何たる主イエスキリストの著しき召なるぞ、祈禱は何たる光榮ぞ、之れ神が祈を求め、之に應へ給ふ確證なり、すべて工人の爲に祈れ。又すべての神學校、傳道者養生所、聖書學館の學生の爲主彼等に資格を授け、之を遣はし給ふまで、出づるなからん樣を祈れ、又教會が學生をして聖靈の降臨を待つやう訓諫し得んが爲、又すべての信者は何時傳道に派遣せらるるも差支へなきやう用意せん爲め、又出で往き能ふものの爲に祈り得る樣祈れ。

如何に祈るべき乎　信じて疑はず

「イエス答へて彼等に曰ひけるは神を信せよ。誰にても其心に疑ふことなく其いふ所の言は必ず成るべしと信じ、此山に移りて海に入れと言はゞ、其の如くあるべし」

可十一〇二二、二三、

神を信せよ。神は誠實あり、全能にして萬事萬物を司どりたまふものなることを汝に知らしめたまはんことを求めよ、然ば今出來得べしと見ゆざることも、神は適當なる工人を充分に與へ給ふの力あるを信じ得る樣勵まさるべし。されど祈と信仰の答として與へらるゝを忘るゝ勿れ、よき工人を要する場所に關して此の祈を用ひよ。働は神のものなり、神はよき工人を與へ得べし、されど神は之を人より求められ又待望まれんことを欲したまふ。

特禱

日用祈の栞

第十二日

何を祈るべき乎　世をして罪ありと曉らしむる靈を

「我訓慰師をあんぢらに遣らん、彼來らんとき世をして罪ありと曉らしめん」　約一六〇七、八、

神の一の願望にしてキリストの降生せられし一の目的は世の罪を去らんことなり。聖靈の世に於る第一の任務は世をして罪ありと曉らしむることなり、之れなくば深くして永續する信仰復興も力ある悔改もある事なし。斯く聖靈の力によりて、福音は宣傳へられ、人はキリストを拒み之を十字架につけしは已に外ならざるを知り、遂に「我等何を爲すべき乎」と絶叫するに至らんことを祈れ。特に福音の說かるゝ時、常に强く罪を曉らしむる能力の顯はれんことを祈れ。

如何に祈るべき乎　神の力を握らん爲め自ら勵みて、

「むしろ我力によりて、我と平和を結ぶべし」　賽二七。五、

「汝の名を呼ぶものなく、自から勵みて汝によりすがる者あし」　賽六四。七

「爾が受けし神の賜を復び熾にすべし」　提後、一。六、

先づ神の力を握れ。神は靈なり。吾は靈によりての外、神を握り堅く神を握る事能はざるなり。既に神の力を握る、神其約束し給ひしことを汝の爲に爲し給ふ迄で放つ勿れ、罪を曉らしむる靈の力を祈れ。

次に自ら勵み、聖靈によりて、汝の裡に在る力を振ひ起して堅く握れ。全心全靈を之に注ぎ、「汝我を祝するに非ざれば我汝を去らしめじ」と云へ。

特禱

第十三日

何を祈るべき乎　燒き盡す靈を

「シオンに殘れる者、エルサレムに止まれるもの、すべて是等のエルサレムにかからうる者の中に記されたるものは、聖と稱へられん、夫は主審判する靈と燒き盡す靈とを以てシオンのむすめ等の汚れを洗ひ給はん」賽四。三、四、

火に由りて洗はれ、審判に由りて潔めらる。斯かるものは聖と稱へらるる可し。世に神の恩寵を降らしむる力、及び働と祈求に効果ある力の如何は、教會の心靈的狀態如何に關す、而して此力は只罪が見出され且取り去らるゝに循ひて進歩し能ふ。審判は先づ神の家に於て初められざるべからず。聖別せらるゝ爲めには先づ罪を認めざる可らず、神の民の罪を見出し、且燒盡す爲めに審判の靈燒盡す靈として、聖靈を與へられんことを神に求めよ。

如何に祈る可きか　基督の名に由りて、

「汝等すべて我名に由りて求ふ所の事は、我れすべて是を行さん、若し汝等何事にても我名に由て求はゞ我是を行さん」

約一四。一三、一四、

御位に座り給ふ汝の贖主なる神の名に由りて求めよ。彼の約束し給ひし所の者、其血を流したまひし所の目的を求めよ、即ち其民の中より罪の取り去られん事なり、其民の中に深く罪を確認する靈を求めよ、是れ主の心にかなへる祈也。燒き盡す靈を求めよ、彼の名を信じて求めよ、即ち彼の好み給ふ其力を信ずる也。」

而して其答を待ちのぞめ、教會が祝福せられ、世亦之によりて祝福せられんことを祈れ。

特禱

第十四日

何を祈るべき乎　將來の教會の爲

「又其列祖の如く頑固にして背むく者の類とあり其心をさまらず其靈神に忠あらざる類と爲らざらん爲あり」　詩七八。八、

「我靈を汝の子等にそゝぎ我が恩惠を汝の末に與ふべければ」　賽四四。三、

我儕の後に起らんとする後代の人々の爲に祈れ、今代の青年男女及び兒童を思ひ、彼等の間に働くすべての役者の爲に祈れ集會、々合、同盟に於て家庭及び學校に於て、基督が崇められ、聖靈彼等を其所有とし給はん事を祈れ。汝の近傍の青年の爲に祈れ。

如何に祈るべき乎　全身を以て

「願くば汝の心の願ひを許し給はん事を」　詩二十。四

「汝は彼が心の願ひを否み給はざりき」　詩二十一。二、

「吾れ心を盡して呼はれりエホバよ吾に答へ給へ」　詩百十五。百四五、

神は在ましてすべての祈求を其全心を傾けて聞き給ふ。我等が祈る時無限の神は其處に在し全心を傾けて聽き給ふ。神は人祈るとき全心を以て其處に在らん事を望み給ふ。吾等が全力を以て叫び得んが爲に基督は人の爲めに已れを神にさゝげ給へり、故に人のすべての求を其祈求の中に取り上げ給ふ若し我等一たび全力を以て神を求めば、神に近づく毎に常に全心を注ぐを得べし。汝全心を注ぎて青年の爲に祈れ。

特禱

第十五日

何を祈るべき乎　各學校及諸大學の爲

「エホバひひ給はくなんぢの上にあるわが靈、なんぢの口におきたるわがことばは、今より永遠になんぢの口より、なんぢの裔の口よりはなれざるべし、わがかれらにたつる契約は是れなりと、此はエホバのみことばなり」（賽五九。二一）

教會と此世の將來如何は我曹の思に越へて大に今日の教育如何に關す、教育は異邦人を傳道せんとして、却て俗的物質的教育に其子弟を放任することあり。各學校と諸大學の爲に祈り、又教會が、其子弟を薫陶する肝要の任務を認め、之を果さん事を祈れ、敬虔なる教師の爲に祈れ。

如何に者るべき乎　神をはづかしむることなく

「かれらイスラエルの聖者をはづかしめたり。」詩七八。四一、

「彼等が信ずる事なきに由て多の異るわざを此になしたまはざりき」　太一三。五八、

「エホバに豈爲し難き事あらんや」　創一八。一四、

「嗚呼主エホバよ汝は多くの大なる能力と、伸たる腕をもて、天と地とを造りたまへり、汝に爲し能はざるところなし」　（耶三二。一七、一八）

汝祈るとき音に不信によりてのみならず、汝自ら神の爲し能ふことを知れりとて神をはづかしむることなきやう慎めよ。我曹が求め我曹が考ふる所より以上の望むべからざることを望め、祈求むる毎に、先づ自から心を靜め其榮光の裡に在す神を拜せよ、神が爲し能ふ事を思ひ、又神が如何にキリストに聽くたまふかを思ひ、自からキリストの裡に在りや否やを思ひて、大なる事を待ち望め、

特禱

第十六日

何を祈るべき乎　日曜學校の上に聖靈の能力を

「エホバかくいひ給ふ云く、まことをが掠めたる虜もとりかへされ、强暴者からばひたる掠物もすくひいださるべし、そは我あんぢを攻むるものをせめて、あんぢの子輩をすくふべければあり。」（賽四九、二五）

教會の各種の事業は、皆神の事業なり。神は之を爲したまはざるべからず、祈とは我曹全く已をすて、已を其聖手に委れ神が我曹の裡にはたらき、我曹により働き給ふとの告白なり、數十萬の日曜學校教師の爲神を知るものが皆靈に滿たさるゝやう祈れ。汝の日曜學校の爲祈れ。小兒の救の爲にいのれ。

如何に祈るべき乎　**憚らずして**

「我儕に大なる宰司の長、すなはち神の子イエスあり、故に我儕憚らずして恩寵の座に來るべし」　來四。一四、一六、

我曹の祈求の業を助くる是等の助言は、我曹の爲に何の用をなせる乎。之れ我曹の祈に力なきを自覺せしめ、たるや然らば福なる哉、之れ實に力あり好果を奏すべき祈をなすに當り、我曹が第一に學ぶ可き事也。我曹憚らず恩寵の座に、祈の各題目を齎らし來りて忍び待つべし、祈るに循ひ我儕祈る事信ずる事愈增し大膽を以て俟む事を學ぶべし。確信を抱け。汝は祈求者として來るは神の命による也。キリスト正しく祈り得る恩寵を汝に與へ給ふべし。

特禱

第十七日

何を祈るべき乎　平和の爲に

「われ殊に勤む、萬人の爲に願告、祈禱、懇求、感謝せよ、王をよび凡て權威を有つものゝ爲には別て之を行すべし」　提前二〇一

祈の能力に於ける驚くべき信仰なる哉。少數にして力無く人より蔑視せられし基督信徒が威權四圍を壓する羅馬諸帝を感化し、其社會の平安幸福を保持するの助とならんとす、われら祈は神が此世を治むる爲に用ひたまふ一能力なることを信ずべきなり、われらの國家と其治者の爲世界の各治者の爲にも、又特にわれらの注意せる市邑又は地方の爲に祈るべきなり。若し神の民にして此に協力するあらば、其祈は彼等の知れるよりも尚多く見ざる世界に其力を及ぼすを知らん、堅く此の信仰を保て。

如何に祈るべき乎　神の臺前に捧ぐる香として

「また一人の天の使金の香鑪を持來て祭壇の側らに立つ、かれ多くの香を予られたり、此は寶座の前にある金の祭壇の上に之を献へて諸の聖徒の祈禱に添へしめん爲なり、香の烟聖徒の祈禱に添て天使の手より神の前に昇れりこの天使香鑪を執り、これに祭壇の火を盛りて、地に傾けゝれば、許多の聲迅雷と閃雷および地震起れり。」默八三五、

同一の香鑪、神の前に聖徒の祈禱を送り又地上に火を降す、天に上り行く祈は、地上の歷史の一部を占む。汝の祈禱神の前に入るを確めよ。

特禱

日用祈の栞

第十八日

何を祈るべき乎　平和の爲に

「われ殊に勤む、王および凡て權威を有てるものゝ爲には別て之を行すべし。是われら敬虔と端莊を以て靜かに安らかに日を送らん爲なり、是は美事あり我儕の救主なる神の意旨に適ふことあり」　提前二。一―三、

「エホバは地の極まで戰鬪を止めしめたまふ」詩四六。九。

アヽ何たる悽き光景ぞ、軍備完成を以て國民の誇となさんとす。アヽ何たる酷き想ぞ、惡しき怒を以ては直に干戈に訴へんとす。而して其結果の如何に慘憺悲痛なる。神は其民の祈に應へて平和を與へ能ふなり。われら之が爲に祈るべし。此平和を建設し得る正義の政治の到所に行はれんことを祈るべし。

如何に祈るべき乎　心(理會力)を以て、

「然らばわれ如何にせん、我靈を以て祈らん又心を以て祈らん」　哥前一四。一五、

然ればわれ如何にせん、我靈を以て、神をにぎらんとせば、神の靈の仲祈の器として、靈を以て祈るを要す。われら若し其求むる所の切要なるを眞に神の前に訴へんとせば、心を以て祈るを要す、祈るとき各題目に就き其祈求の性質、範圍、必要と神の言によりて啓示せられし神の約束の基礎、方法と其確實なるを充分悟り得る迄、時を惜まずして待て。其思心を動かすに至らしめよ。心を以て又靈を以て祈れ。

特禱

第十九日

何を祈るべき乎　基督教國の爲に聖靈を

「彼等は敬虔の貌あれども實は敬虔の德を棄つ」提後三〇五

「汝に生ける名ありて其實は死ぬことを知る」　默三〇一

基督信徒の名を有する者五億あり、其多數の狀態寒心すべきと言語に絶せり。　形式、俗流、不敬神、キリストに對する奉仕を拒む事、無知冷淡、是等の者が勢を得る又實に大なり。　われらは異教徒の爲に祈る、然れどもキリストの名を負ふ者にして、實は異教徒よりも暗黑なる者多し、一方に彼等の爲に祈れ。

此に於てか汝は此等の靈魂の爲に、夜ひる神に祈る爲全生涯を獻げざるべからずと思ふまでに至らざるか。　祈に臨へて神は聖靈の力を與へ給ふ。

如何に祈るべき乎　深く心を靜かにして

「わがたましひは默して神をまつ、わがすくひは神より出づるなり」　詩六二〇一、

神によりてのみ祈は力あり、神に近づけば近くほど、深く神の意を知るべく神を堅く握れば握るほど、祈に力あり。

神は自を啓示し給ふを要す。　若し神が自からを人に知らしめるを欲したまふとせば、人の心に其臨在をも知らしめ給ふ可しわれらは敬虔と靜待と崇拜の跡度を保つべき也。

仲祈の生涯數月を經、其事業の偉大なるを感ずるに循ひ、愈神前に靜まれよ。　かくて汝は祈禱に力を得べし。

特禱

第廿日

何を祈るべき乎　異教人の爲に聖靈を

「視よ人々あるひは遠きより來たり成は又シニムの地よりきたるべし」　賽四九。一二

「諸侯はエシブトより來り、エテオピヤはわはたゞしく神にむかひてこの事をあさん」　賽六。二二、

神の語を知らざる異教人の爲に祈れ。三億の民、月々に一百萬の人、キリストを知らずして死し行く支那を思へ、二億の人民を有する暗黑亞弗加を想へ、一年三千萬の人、常世の暗に亡びつゝあるなり。アヽキリスト若し彼等の爲に死したまひしならば汝も亦しかせずや、汝は彼等の爲に神に祈求むる爲に身を献げ得るなり。汝若し未だ曾て之を始めしことなくば、此單簡なる栞に依りて之を始めよ、若し最初十分間祈り始めば尚ほ多くの時間を祈禱に用ひざるべからずと感ずるに至るべし。神の靈は汝を導きたまふべし。汝よわくとも堅忍せよ、何國何種族の爲に祈るべき乎を神に問へ、キリストが爲したまひし如く爲すよりまさりて崇高なることありや、異教人の爲に汝の生涯を與へよ。

如何に祈るべき乎　信じて答を待ち望みて

「汝われに顧求めよ、われ汝に應へん、汝が知らざる大なる事と秘密くれたることを汝に示さん」　耶三三。三、

「主エホバかく言ひたまふ我是を爲さんことを我に求むべきなり」　結三六。三七、

兩節とも確かに定められし神の約束を示す、されど此等の約束の成就は祈の如何に關す。我儕が其約束を成就し給はん事を求むるは神の欲し給ふ處なり、神が其の子と教會に與へ給ひし約束の成就を祈りて答を待ち望め。異教人の爲に訴へよ、神の約束に訴へよ。

特禱

第廿一日

何を祈るべき乎　ユダヤ人の上に神の靈を

「われダビデの家および エルサレム居民に恩惠と祈禱の靈をそゝがん、彼等はその刺したりし我を仰ぎ觀、獨子のために哭くが如く、之が爲に哭き長子の爲に悲しむが如く、之が爲に痛く悲しまん」　亞十二。一〇、

「兄弟よ、我心に願ふ所と、神に祈る所は、イスラヘルの救はれんことなり」　羅一〇、一〇、

ユダヤ人の爲に祈れ、其如何なる理由なるかは我儕の知らざる處なれども、彼等が其祖先等の神に還ることは、教會に著しき恩寵の降る事と又我らの主キリストの降臨とに深き關係を有するなり。此事は神の預め定め給ふ處にして之を速かにする能はずと考ふる勿れ。神は其奇しき方法により、其約束の成就を われらの祈禱と相待たしめたまへり。われらの衷にある神の靈の仲祈は、神の恩寵の先驅なり。イスラヘル人と彼等の間になさるゝ事業の爲にいのれ。

如何に祈るべき乎　聖靈の慨嘆を以て

「我儕いのるべき事を知らざれども、聖靈みづから言ひがたきの慨嘆を以て我儕の爲にいのりぬ」　羅八。二六、

暗く心よわきうちにも聖靈ひそかに汝の衷に在して仲祈し給ふ事を信ぜよ。斷じて自からの聖靈の生命と其指導に委れよ。されば かれは祈に於て汝のよわきをたすけたまうべし。汝自から如何にして成就せらるべきやを知らざるときにても、尙神の約束に訴へよ。神は聖靈の心を知りたまへり。そは聖靈は神の聖意に從ひて、聖徒の爲に仲祈すればなり。嬰兒の如き無邪氣なる心にていのれ。聖なる畏と敬を以ていのれ。是れ聖靈を衷に宿して祈る者の有する處なり

特禱　一、一、一、

第廿二日

何を祈るべき乎　すべて惱み苦めるもの〻爲に

「己とともに囚るゝが如く囚者を念へ、又汝曹の身にある
が如く惱まさるゝものを思へ」　來一三・三

われらの住める此世は如何に苦と惱の世なる哉。如何にイエスは身自から苦惱の人となり、之が爲に身を献げられしよ。われら亦おのが分に應じてしかすべきなり。見よ迫害せられたるアルメニヤ人、ユダヤ人、飢饉に迫られたる幾百萬の印度人、アフリカに於ける世に知られざる奴隷、諸大都會の貧窮と其慘狀を而して尙之に勝れるものあらん。アゝ神を知るものと又知らざるものゝ間にある苦みと惱みは如何に大なる哉、又小にしてはわれらの身邊にある悲は如何に。幾千のホームと心にある嘆は如何に。又われらの慰めと扶けを要むるわれらの隣人の如何に多きを見ずや。われらをして彼等を思ひやり、其悲に同情せしめよ。さすれば之によりてわれらは祈り、うとめ、望み、且つ更に愛するに至るべく、かくて神はわれらの知らざる方法と時期に於て、われらの祈に應へたまふべし。

如何に祈るべき乎　恒に祈禱して沮喪せずに

「イエスまた人の恒に祈禱して沮喪すまじき爲に譬を彼
等に語れり。」　路一八・一

汝は祈禱は此の罪ある世にとりて眞に、救助なるを感じ初めざる乎。斷えざる祈、如何に必要ならずや。此の祈求の事あまりに廣大なる爲、われらを絶望せしむ、思へらく僅かに十分間の祈禱、如何で力あり得べきやと。然り、しか感ずるは當然なり、かくの如くにして、神は我らを召して祈の爲に生涯を献げしめんと備をなしたまふなり。人の爲に全く汝の身を與へよ、汝がすべてのわざを爲す間に、汝の心は愛により人に對して引き出され、信賴と待望により神に對して引上げらるべし。聖靈により てかく導かれたる人は恒に祈りて沮喪することなかるべし。

特禱

第廿三日

何を祈るべき乎　汝の働の上に聖靈を

「我これが爲に大能を以て我が裏に働く者の運用に循ひ力を竭くして勞するあり」　西一。二九

汝は特に汝の爲すべき働を有せり。之を祈求の働とすべし。パウロは彼の裏に働きたまふ神の働に循ひて力を竭して勞したり。神は實に造物主たるのみに非ずして、萬事に働きたまふ大なる働人なるを忘るゝ勿れ。汝は唯聖靈により、汝の裏に働きたまふ神の力によりてのみ汝の働きを爲し能ふなり。汝の働を受くる人々の爲に多く祈り神が彼等の爲めに生命を汝に與へ給ふ迄で已む勿れ又われら相互の爲、神の教會に屬するすべての役者、よし孤獨のものにても無名のものにても、彼等の爲にも祈り求むべきなり。

如何に祈るべき乎　神の聖前に於て

「あんぢら神に近づけ、然らば神はなんぢらに近き給はん」　雅四。八、

神は神に近かんと心專らにつとむるものに近く在ましたまふ。「神に近づけ」神の近きにいたまはんことを求めよ、神は求めに應じて「汝に近きたまへ」とふべし。」されば容易く信じて祈るを得るに至らん。神の初めて汝を此の祈求の學校に入學せしめたまふや。他人の爲より も殆んど汝自からの爲なるを忘るゝ勿れ。汝は愛し、待ち、祈り、信ずるやう教育せらるゝを要す。唯忍べ、自からを神の聖前に置きて、靜かに神の近きたまひしことを確め得る迄待つやうにつとめよ、神の聖前に進みて其處に止り、主の前に汝の働きを陳べよ、汝の働を受くる人々の爲に祈り求めて、神より恩寵を得、汝自からの心にも神を靈をうけよ。

特禱

第廿四日

何を祈るべき乎　汝の教會の上に聖靈を

路二四。四九

「エルサレムより始まり」

われらは皆或る教會の信者の團體に屬するものにして、其信者は各我曹が最も直接に關係あるキリストの体の一部たり、我曹は殊に彼等の爲めに祈求する責任を有す、此等の會衆或は團體は又、われらに、特殊の祈求を要むるなり。されば是等の爲に祈禱を以て勞する事を神と汝の間に定まれる事とせよ。此等の爲に働く牧師、教師、役者の爲にいのれ。又其各々缺けたる處を知りて信者の爲に祈れ。改信の爲にいのれ、聖靈其能力をあらはしたまはんことをいのれ。時を定めてひそかに共に祈る者の仲間入りせよ。説教若しくは日曜學校の如く祈求も組織的に行はるゝ一定の事業とせよ。而して答を待ち望みつゝ祈るべし。

如何に祈るべき乎　斷えず

「斥候をおきて終日終夜たえず默すことなからしむ」賽六二。六

「神は晝夜祈る所の選びたる者を久しく忍ぶとも終に救ばざらんや」路一八。七、

「夜晝切りに願ふ所は爾曹の信仰の足らざる所を補はんこと也」撒前三。一〇、

「眞の寡婦は唯神に依賴み夜も晝も願求と祈禱を恒にする也」提前五。五、

神の榮光とキリストの愛と人の要求のわれらに示さるゝときは、斷にざる祈求の火われらの裏に燃ゆ上りて、遠近にあるわれらの知れるものゝ爲に祈るに至る。

特禱

第廿五日

何を祈るべき乎　尚多くの改信者を得んが爲に

「彼は懇求んとて恒に生れば彼等を全く救ひ得るあり」

來七。二五、

「我儕は常に祈ることゝ道を傳ふることを務むべし……

神の道いよ〳〵傳播して弟子甚しく增す。」徒六。四、七、

キリストの救の力、全き救の力は其斷へざる祈求に因れり。使徒等の他の職をすてゝ斷へざる祈求に身を委ねるや其結果弟子等の數甚しく增すに至れり、今日とてもわれら亦身を祈求に委ねれば、更に多大なる改信者を得べきなり。われら之が爲にいのるべし。キリストの擧げられ給ひしは悔改者を得んが爲なり、教會が此世に置かるゝは改信者を得しめんとの神の目的と約束あるにあり。われら愧ることなく己が罪とよわきを告白して、基督教國にも異教國にも、尚多くの改信者を得るやう神に叫ぶべきなり。又われらの知れる者愛する者の爲にも之を爲すべきなり。罪人の救はれん爲に祈り訴へよ。

如何に祈るべき乎　深き謙遜を以て

「主よ然り、されど犬もその主人の膳より落つる屑を食ふあり……婦よ汝の信仰は大なり、願の如く汝に成るべし、

太五。二七、二八」

汝は正しく禱らんとするに德なく能なきを感ず。心より之を認め、其德なきながらも尚甘んじて來り、祝福せられんとすることそ眞の謙遜なれ。而して此の謙遜たるや、自から何事をも求めずして單に主の恩寵に委ねるに至つて、初めて全し。此に大なる信仰の活力あり此に全き應驗を得るなり。「されど犬も」……。之れ汝が或る惡鬼に憑かれたるものゝ爲にする哀訴たるべし自から數ふるに足らざるものなりとして一瞬間も躊躇する勿れ。

特禱

第廿六日

新改信者の爲に聖靈を

何を祈るべき乎

「ペテロとヨハネくだりて彼等が聖靈を受けん爲に祈れり蓋かれら唯イエスの名に入れられバプテスマを受けしのみにて未だ其一人にも聖靈下らざりしに因る」 徒八。一五、一六、

「我儕を爾曹と偕にキリストに堅固し、且つわれらに膏を沃く者は神なり彼また我儕に印し且質として靈を我儕の心に賜へり」 哥後一。二一、二二、

新改心者にして尙弱きもの、如何に多き、其罪に陷るもの、如何に多き、又全く後進するもの、如何に多き、われら若し教會の爲に益々聖に進み神のつとめの爲に熱心なる者とならん事を祈らば特に新改心者の爲に祈るべし。見よ、試誘に圍まれて孤立せるものゝ如何多きを、聖靈と彼等を堅く立たしむべき神の能力を知らさるものゝ如何に多きを又異教國にありて、サタンの權威に圍まれたるもの、如何に多きを。汝若し教會の內に働きたまふ聖靈の能力を祈るならば特に新改心者の聖靈に充たされん事を要求し又充され得べきことを知り得るやう祈るべし。

如何に祈るべき乎　**斷へず**

「また我は汝等の爲に祈ることを止めてエホバに罪を犯すことを決めてせざるべし」 母前一二、二三、

人の爲に祈ることを廢するは主に對する罪なり。一たび仲祈は神を愛しキリストを信ずると等しく信者たる我曹に欠くべからざる義務なるを知り始むれば、仲祈を廢するは哀むべき罪なり、われら喜んで己を祭司の位置に置き天の恩寵を祈り下す爲にわれらの生涯を獻ぐべきなり。

特禱

一、

一、

一、

第廿七日

何を祈るべき乎　神の民が其使命を果さんことを

「我汝を祝せん汝は福祝の基となるべし天下の諸の宗族汝によりて福祝を獲ん。」（創一二〇二三）

「ねがはくは神われらをあはれみわれらをさきはひてその聖顔をわれらの上に照し給んことを、此はあんぢの途のあまねく地に知られ、あんぢの救のもろ〳〵の國のうちに知れんがためなり。」詩六七。一、二、

アブラハムの祝福せらるるは唯彼が全地に祝福たらんがためなり。イスラエルは神の全地に普く知られ給ふことを願ひ給ふなり。

自己の信者のみ祝福せらるるは唯神に祈るべき事なり。

神は世界の各地に生ずる信者をまた知るなり。

生ずる信者は心を神に至らしめんが為に祈り求むる者の如く、眞の大群となり起るなり。

傳道者は世界の人の為めに自ら神に求むる所は既に他人の為めに祈るべき乎

如何に祈るべき乎

「ペテロ曰ひけるは惟われに有てるものを爾に予ふ。…聖靈はじめに我儕に降りし如く彼等にも降れり。…神は我儕に賜ひし如きおなじ賜物を彼等に予給へり」

使三。六。一〇、十五、十七。

神の働の為めに用ひられんが為めに、此恩寵を祈る時は神に自から任せ、信仰によりて。此賜物を新に求めよ。自からよわしと感じ其足らざるを想ふ毎にいや益熱心に人の為に祈れ。かくて神の賜物の彼等に與へらるゝときは、おのれ自からも亦恩まるべし。改信者と傳道事業の為にいのり。神の民が皆全く神に屬するものなるを知るに至らん事を祈れ。

第廿八日

何を祈るべき乎　すべての神の民の聖靈を知るに至る爲

「眞理の靈、世之を接くること能はず、蓋これを見ず、且しらざるに因る。　されど爾曹は之を知る、そは彼あんぢらと偕に在り、かつ爾曹の衷に在ればなり」　約一四。一七、

「爾曹の身は聖靈の殿あることを知らざる乎。」哥前六。一九、

聖靈は人を救に導く神の權能なり。　聖靈は只教會中に住みてのみ働き給ふ。　信者が全く聖旨に適ふ生涯を送り、又神が人を全く救ひたまふ事を充分經驗し之が證をなす爲に聖靈は與へられる。　神の民各が聖靈を知るに至るやういのれ。　聖靈限りなく與へられ聖靈に充たさるゝに非ざれば、神の好み給ふ如き生涯を送り得ざる事を知るに至るやういのれ。　異邦人の中に建てられたる教會にても神の民は「吾は聖靈を信ず」と唱へ得るに至るやういのれ。

如何に祈るべき乎　力を盡して祈禱をあし

「汝曹の中の一人あるエパフラス爾曹に安を問ふ彼は恒に爾曹の爲に力を盡して願禱をなし爾曹が完全を得心を堅くして立凡ての事、神の旨に遵はんことを願へり。」　西四。十二

健全なる人には働は樂なり。　己れの趣味を感ずる事には人は力を盡して働くなり。　神の靈に充たされたる健全なる信者は、力を盡して祈るなり。　何の爲に祈る乎。　卽ち其兄弟皆完全を之心を堅くして神の旨に遵はんが爲に祈り、又彼等が神が何を彼等に望みたまふ乎、如何に日々の生涯を送らしめたまふ乎を知り聖靈によりて導かれ且つ歩ましめんが爲に祈るなり。　神の子供等が皆此の事の神の保證したまふ所、必ず成るべきを知るに至らんが爲に力を盡して祈りつとむべし。

第廿九日

何を祈るべき乎　祈の靈を

「あんぢら我を選ばず、われ汝曹を選べり、汝ら凡て、我名に託りて、父に求ふ所のものを彼をして汝曹に賜らせんが爲なり。」　約十五。十六

「あんぢら今迄わが名によりて求たることなし。其日汝曹我名に託りて求めん。」　約十六。二四、二六、

此の祈の栞は如何にわれらが稀なるを示したるに非ずや、イエスは其弟子に約束したまへり。聖靈なんぢらに來るとき其日には汝曹に、祈求のなんぢらわが名によりて求むべし。千人中の百人は皆祈求なれらと是等の人々の力なく居るに非ざる乎、今日の祈求は欠乏すらもまたなし。

のべて嘆ずるのみ。

裏に神の子の供等の爲に數へたのまるひも、又のキリストに足れるもの。

聖靈の在ますを知り、われらの裏に働きたまふ聖靈なるを得しめよ。

切に要なるものは何事なるや、世界最も能はざるなり。

ふに外なるものは地上にすべて呼び下す強大なる祈求の生ぜしめよ。

如何に祈るべき乎　キリストに居りて

「あんぢら若しわれに居り、わがいひし言あんぢに居らば、凡て欲ふところ求に從ひて予へらるべし。」　約一五。七、

われらの神に受け納れらるゝもわれらの神に往き得る途も全てキリストにあり。われら若しキリストに居るを覺らばわれら自由を得べし。その自由はわれらの古き性質古き意志に許す所の自由に非ずして、すべての私慾より脱する貴き自由にして、われらの願ふ所、此新なる性質により皆與へらるべし。われらかくおのが位地を保ち、今も尚われらの仲祈の聽かれたるとわれらのすべてに祈の靈の與へられたるを信ずべきなり。

特禱

第三十日

何を祈るべき乎　神の語と聖靈と

「われらの福音汝曹に來りしは唯言に由りてのみならず、能により聖靈によりまた篤き信仰によりてなり。」撒前一、五

「今天より遣り給ふ聖靈に由りて、福音を傳ふる者の汝曹に告ぐる所の事あり。」彼前一、一二、

今日迄聖書の配布せられしことは實に無數なり、聖書に關して說教せられし事も亦然り。家庭と學校に於て聖書の讀まれしは無數なり。されど若し是等にして、唯「語によりてのみ」來りしとせば、如何其に結果の薄弱なるべき、之に反して、「聖靈によりて」來り、天より遣りたまふ、聖靈に由りて說かるゝ時は、如何に好果あるべき。聖書配布の爲に祈れ、且つ聖靈と祈禱とに由りて、聖書の說かれ、敎へられ、讀まれんことを祈れ。汝の近隣の爲に神の語の聖靈の力によつて說かれ、之を讀むもの、聽くものの爲にいのれ。われら「神の語」を口にする毎に祈求の精神を奮起すべし、

如何に祈るべき乎　目に醒まし且つ祈れ

「恒に祈禱なし、怠らずして感謝と共に之を爲すべし。また神われらに道を傳ふるの門をひらきたまはんことをいのるべし。」西四、二、三、

汝は如何に萬事の神と祈禱に因るを見ずや。神在まし神愛したまふ限り、神聽き神働きたまふ限り、神の語に密着せる心をもてるも人ある限り、神の語を傳ふる働の存する限り、斷えず祈るべし、恒に祈禱をなし、怠らず感謝と共に之を爲すべし。是れすべての信者に謂ふなり。

特禱

第卅一日

何を祈るべき乎　キリストの靈を其民に

「我は葡萄樹なんぢらは其枝なり」　約一五、五、

「我なんぢらに行ひし如く爾曹にも行はしめんが爲なり」　約一三。一五

枝として、われらは「葡萄樹」の如くならざるべからず、即ちわれら全く之と同化し、同一の性質、生命、精神なる如く人に見ゆる迄に至らざるべからず。われら聖靈を祈るとき、曾に其能力を思ふみならず、又キリストイエスの眞の性情をも忘るべからず。求めよ。而して小ならざることを待ち望め、汝自からの爲、また神のすべての子供の爲に之を神に呼べ。

如何に祈るべき乎　力を竭して祈り

「願くは我と共に力を竭してわが爲に神に祈ることをせよ」　羅一五。三〇、

「われ汝の爲に心を勞することと如何ばかりなるを知らんことを望む」　西二。一、

すべての惡の勢力はわれらの祈を妨げんとつとむ、祈禱とは反對勢力と爭ふことなり。故に之を爲すには全心全力を要す、願はくは神われらの勝を得る日迄祈に於て爭ふとき、われらに恩寵を與へたまはんことを。

特禱

日用祈の栞

明治卅四年十二月廿五日印刷　（定價金十錢）
明治卅四年十二月廿二日發行

發行人　東京市京橋區竹川町十五番地　中川藤四郎
印刷人　東京市京橋區築地一丁目十八番地　河本龜之助
發行所　東京市京橋區竹川町十五番地　日本聖公會出版社
印刷所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社國光社印刷部

146
676

2
1

020251-000-4

特62-421

祈の栞（日用）

アンドレウ・マウレー／編

M34

ABI-0056